

琉球台僑総会の

張本光輝（はりもと・みつてる）会長、

会場にお集まりの来賓の皆さま、会員の皆さま、こんばんは！

本日、この沖縄で、たくさんの方々の台湾出身の皆さまとお会いできますことを大変光栄に感じております。

ご存知のように、日本と台湾の関係は非常に密接なものがありません。経済や貿易関係に始まり、科学技術、文化、観光、学術分野など、多岐にわたる分野で長年にわたり友好的な関係を築いてきました。

台湾にとって日本は技術導入や投資を呼び込む重要なパートナーであり、第三位の貿易相手でもあります。また、台湾は日本にとって四番目の貿易パートナーであり、二〇一七年における双方の貿易総額は、627億米ドルにまで達しています。

台湾の人々が最も好んで旅行先に選ぶのは日本です。昨年、日本に旅行した台湾人は456万人を記録しました。日本からも台湾へ190万人の人々が訪れ、訪台者数では第二位となっています。

近年、台湾から日本へと留学する学生数は九千人あまり、日本から台湾へ学びに来る学生は一人を超えていると聞きます。

こうした事例を挙げるまでもなく、恐らくここにいらつしやる皆さんは、私以上に様々な分野で日台間の密接な交流が行われていることをご存知でありましょう。

もしアジア各国が日台のように友好的かつ建設的な協力関係を築き上げることが出来るのであれば、世界はより美しく、平和になることでしょう。

ただ残念なことに、今日のアジアには巨大な不安定要因が存在すると言わざるを得ません。

ご存知の通り、二十一世紀に入り、中国は経済・政治・軍事・科学技術などの各分野で目を見張るような発展を続けてきました。ただ、ここで指摘しなければならないのは、中国の発展は「覇権主義的」だということです。決して民主的かつ自由な文明ではありません。

その結果、アジアにもたらされた動揺は、周辺国家の安全保障にとって大きな脅威となっています。中国こそ、アジアの情勢を最も不安定にしている要因だと断言します。

各国が有する軍隊は、自国の防衛のために存在します。しかしながら、中国の軍事力は対外的な膨張を続けてきました。昨年、中国の軍事費は2280億米ドルを超えています。

東シナ海や南シナ海の問題、各国の航行の安全と自由が侵害された例を挙げるまでもありません。

ん。

中国は「アメとムチ」を用いて、ミャンマーやマレーシア、スリランカ、パキスタン、果てはアフリカのジブチにまで軍事基地を建設し、それによって生じる周辺国家との摩擦は途切れることがありません。

こうした行為は地域のリスクを高めるとともに、アジア各国の軍事的支出を増加させることとなり、あたかも軍拡レースを助長することにもなるのです。

中国が掲げる「一帯一路」構想は、野心に満ち満ちた覇権主義的な計画です。

中国にとっては、自国の内部資源やエネルギー問題を解決するための方法となり得るでしょう。さらには、国際貿易上のルールを恣意的に決めることのできる格好の手段となり、他国を唯々諾々と従わせ、世界の新たな支配者に君臨しようとしているのです。

これは中国の覇権主義に見られる一貫したやり方です。しかし、結局のところ、この計画は、多くの国家を中国の経済的植民地に貶める方式と言わざるを得ません。

ここへ来て、マレーシアは中国の覇権主義が自国へ及ぼすマイナスの影響に思い至ったようです。マハティール首相は、クアラルンプールとシンガポール間を結ぶ高速鉄道建設計画の中止を決めました。

マハティール首相は東海岸に高速鉄道を敷く必要性に疑問を投げかけると同時に、高速鉄道の建設には何ら意味がなく、マレーシアに利益をもたらすことはないとしたのです。

2

その他にも、中国が関係する大規模計画について、全面的に再審査することも表明しています。

中国の専制的なやり方に、最も大きな影響を受けているのは台湾です。中国は少なくとも一千発以上のミサイルの照準を台湾に向けています。領空侵犯や領海侵犯など、武力による軍事的恫喝は日常茶飯事とも言えましよう。

外交においては、あらゆる手段を講じ、台湾と国交を有する国を奪い、台湾が国際組織に参加することを妨害しています。

経済面では、台湾企業の工場から最先端の高度な技術を盗み、優秀な台湾の人材を引き抜くとともに、彼らに対し、自らの政治的思想を放棄して中国に忠誠を誓うことを強要するのです。

中国は、金・権力・色をたくみに用いて我が台湾の同胞を抱き込み、台湾内部から分断を図ろうと企んでいます。

中国は「中国の夢」という耳ざわりの良い言葉で大中華思想を喧伝し、「九二コンセンサス」を作り出して台湾の政治的、経済的な発展を抑え込んできました。

「文武両面での威嚇」「武力による統一」「ビジネス面から政治への圧力」「台湾内部からの分断」など、様々なカードが絶え間なく切られています。

中国の最終目的は、台湾を併呑し、いわゆる「中国統一」を成し遂げることにあるのです。

私たちは、中国が台湾を矮小化することを恐れてはいません。私たち自身が台湾を矮小化することも出来ません。

台湾の人々のなかには、中華思想に毒され、自我を失い、希望を失くしている人もいます。ただ、中国の覇権主義に屈することは、あまりにも短絡的であると言わざるを得ないのです。

中国の覇権主義に直面する台湾は、自主的な思想を持たなければなりません。自分たちの道を歩む必要があるのです。

私は『新時代の台湾人』という著書のなかで「民主改革を成し遂げ、民主国家となった台湾は、もはや民族国家へと後戻りするべきではない」と書きました。

私たちは、幻の大中華思想から、脱却しなければなりません。台湾の国民が持つ共通の意識は「民主主義」であって「民族主義」ではないのです。

民主主義と自由は、人類の文明にとつて最も重要な価値観でありましょう。それは同時に、私たちに平和と安定、繁栄と進歩をもたらす基盤となるのです。

反対に、中国は民主主義や自由といった価値から遠く離れ、富と軍事力による、かりそめの繁栄を喧伝しています。

「偉大なる中国の夢」という言葉で国民を欺き、愚弄している中国政府の目的は、ただただ独裁体制の維持と安定にすぎないのです。

多くの中国人が言うように、中国の人々には本当の自由というものがありません。不安と恐怖というものを心の奥深いところに押し込めています。

3

私はここで改めて中国政府に呼びかけます。

「台湾は今も、これからも、中国の敵ではありません。中国にとって最大の敵は『本当の民主主義』『本当の自由』でしょう。そして台湾こそ、この『本当の民主主義、本当の自由』の代名詞なのです」と。

台湾が代名詞たりうることは、台湾人のみならず、全世界の自由民主国家が明確に認めていることです。

如何にして、中国の人々に永続的な民主主義と自由を与えるか、如何にして中国の人々が永遠の幸福を追求出来るか、こうした課題こそ、中国政府が積極的に考えなければならぬ問題ではないでしょうか。

世界の強国となりたければ、それは決して覇権主義の発露ではなく、普遍的な価値観を有する文明の実現によって成されるべきだと思ふのです。

台湾の民主主義と自由は、もはや全世界が称賛するモデルにまなびつつあります。

私は、台湾が民主主義と自由を継続的に追求し、実践し、深化させていくことを続けてさえいけば、外来的な一切の圧力や干渉に怯えることはないと思ふます。そしていつの日にか、私たちの国の名前によって国際社会に躍り出る日が来ることになりましょう。

以上で、本日の私のお話しを終わります。  
ありがとうございました。